



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山崎孝史『政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて』
Author(s)	岩下, 明裕
Citation	境界研究, 2, 203-206
Issue Date	2011-11-25
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.2.203
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61244
Type	departmental bulletin paper
File Information	11Iwashita.pdf



[書評]

山崎孝史『政治・空間・場所： 「政治の地理学」にむけて』⁽¹⁾

岩 下 明 裕

1. 歴史本質主義の呪縛

もしあなたが米国にいて、日本外交について米国の歴史研究者の報告をきいたとする。日本語も堪能なプレゼンターが、近年の日本外交を聖徳太子の十七条憲法「以和為貴。無忤為宗(和を大事にし、いさかいをおこすな)」をもって、したり顔で解説したら、あなたはどうか。いや、そこまでさかのぼらなくてもいい。江戸時代の「鎖国」を引きながら、日本外交など結局は外圧がなければ変わらないなどといわれたら、納得するのか？近代前後、大戦前後の日本の国家と社会の変化をみれば、時代を無視したかかる単純な連続論に首をかしげるのが自然だろう。

だが私たちが「専門家」として、よその国や地域を論じるとき、しばしば同じようなアプローチをする。例えば、ロシア人は独裁者や権力者が好きだと決めつける。プーチンはスターリン、いやピョートル大帝のような振る舞いをしている。ロシアの社会は「みんなバラバラ(スチヒーヤ)」なので、「強い手」がなければまとまらないからだ。外交も同じように、外にむかって強さだけを追い求める。彼らは力しか信用しない。そして絶えず膨張しようとする。南下は帝政期以来の変わらぬロシアの行動原理だ。

例えば、中国の国営中央テレビをみる。外国の要人たちが中南海を訪問し、胡錦濤はこれを「よっしゃ、よっしゃ」と迎える。まるで叩頭外交。中国はいつでも自らをすべての中心に置いている。そして、皇帝の光が届く範囲のすべてが中国だ。彼らの思考に対等な国家関係などない。上下関係があるのみ、そして常に廻りを睥睨しようとする。中国外交は「4000年」の伝統のままに。

この種の歴史過剰な本質主義的な立場にたつ限り、争いは永久に続かざるを得ない。「ロシアは悪者だからあくどい外交をする」「中国は異質だから信用するな」。日本自身も欧米から「特殊な国」と何度もバッシングされた経験をもっているのだが、他者に対するバイアスへの自省はあまりない。歴史本質主義の眼差しは、比較を疑い、他者との対話を拒否

(1) 山崎孝史『政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて』ナカニシヤ出版、2010年。

し、自らが関わる世界の「固有性」に閉じこもうとする。境界をめぐる係争において己れの正当性を絶対視しようとする、この内向きのバリアをいかに乗り越えるかは、私たちが取り組むボーダースタディーズ(境界研究)にとっての最大の挑戦でもある。

境界問題にかかわる歴史研究は、本来、一次資料の丹念な蒐集と丁寧な資料批判、さらには(マルチ・アーカイブなどによる)バランスのとれた多角的・多元的な分析の上にのみ、成り立ちうるのであるが、ナショナリズムの呪縛と政治によるイシューの操作は、この種の地道な成果を常にかき消そうとする。

2. 「政治の地理学」という視座

歴史本質主義の問題点の一つは、時系列や史実へのある種のこだわりとは対照的に、空間のもつリアリティを捨象しがちなことである。例えば、古典的な政治史は権力の担い手間の闘争史として描かれるが、この場合の分析は首都(のしかもほんの一部のサークル)に集約されがちである。権力史観を越え、その叙述が広がりをもつ場合でも、権力ヒエラルヒーのなかの抗争、精々、民衆や市民といった抽象化された主体を通じて整理されるに留まる。具体的な個別空間において地域史が描かれることはあっても、時系列や時期区分で分析が構成されるかぎり、同時並行的に折り重なる多元的な様相をひとつの時間軸でまとめることには限界があり、地域史のもつ空間的意味を全体のなかで位置づけるのは容易ではない。

冒頭で触れた粗雑な日本外交論に戻れば、その限界は空間論の欠如、つまり、古くは日本列島の一部を占めたに過ぎないヤマトから大戦前には広大なアジアを支配した帝国に至る日本の空間変容の意味を考えようとしないうことにつきる。いわば、空間への視座なき歴史研究は、容易に本質主義へと転化する。元来、日本のものでも、ロシアのものでも、韓国のもので、中国のものでなかった島々を、みなが「固有の領土」として真剣に主張しあわねばならない滑稽さは、この本質主義の極致といえる⁽²⁾。

山崎孝史の手による『政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて』は、この種の歴史本質主義に対する格好の解毒剤を提供している。山崎は、本書のなかで空間をもとに議論を積み重ねる手法の意味を丁寧に解説する。とくに日本ではタブー視されていた政治にかかわる空間研究を、その理由から説き起こし、今日、その研究が必要な意義を重層的に提起している。

「第1部 政治地理学がたどってきた道」では、政治地理学の起源と地政学の盛衰、戦後日本でなぜ政治地理学が発展しなかったのか、これからの課題とその展開の必要性について、英語圏の地理学を参照しながら、詳しく説明する。とくに世界システム論をも包摂し

(2) 岩下明裕『『不法占拠』と『固有領土』の呪縛をどう乗り越えるか』『世界』別冊816号、2011年、79-86頁。

たスケール(ローカル、ナショナル、グローバル)を軸としたテイラーの議論、言説分析を通じた権力現象の解明を目指す批判地政学、さらには「場所(place)」を軸として構成された政治分析にかかわる解説は、空間を分析する研究にかかわりながらも、自らの地理学的アプローチを意識してこなかった研究者を覚醒させる。

「第2部 空間・場所・領域」では、この空間分析の具体的手法やその限界を整理する。心理学に基づく「知覚・行動の地理学」、特定の場所に対する個人の主観・感情に注目する「人文主義地理学」、経済的法則や資本主義社会の矛盾にこだわる「マルクス主義(ラディカル)地理学」、近代を乗り越えようとする「ポストモダン地理学」等の議論は、他の社会科学のスペクトルと照合しており、政治地理学のもつ豊かな知的枠組を読者は知ることになるう。

第2部の後半から、「第3部 コンテキスト／スケール／言説の政治」、「第4部 事例研究にむけて」は、山崎が前半で整理した様々な政治地理学の理論的方向性が、山崎自身の具体的な研究成果を手かりに、多様かつ説得的に展開されている。それは沖縄の米軍基地、分譲マンションの間取り、アフリカの植民地分割、監獄の設計図、歌舞伎町の犯罪マップ、市町村合併、地域防犯の取り組み、などおよそこれらを並べて論じることなど想像だにつかない様々な空間やそれにかかわる言説が分析の対象となる。空間にかかわるものであれば、何でもとりあげる、比較できないものなどない。そしてその空間にかかわるあらゆる政治的意味合いを読み解くこと、これこそが政治地理学の今日的意義だと評者は思うに至った。ただし、本書が直接のターゲットとしているのは日本的(脱政治的)地理学であって歴史学ではないことは明記しておこう。

3. 歴史と地理の邂逅

そもそもボーダースタディーズが国際法学と地理学から生まれたことを考えれば⁽³⁾、またこの学問分野が空間における境界の問題を取り扱う以上、山崎のいう「政治の地理学」が分析手法のしかるべき柱としてより意識されるべきだろう。しかしながら、ただ1つ、比較の手法における問題点をあげれば、その際に紛れ込みかねない「偽物」をいかに見分けるかということにある。国際地理学会などでのパネルをみれば明らかだが、空間を論じるという共通理解でセッションが組まれるため、その地域の専門家が報告者1人ということもある。いわば、報告者がその地域の確かな専門家であるという信頼と前提に基づいて、知的交流や比較の議論を行うわけだが、報告者への信頼を検証することがしばしば難しい。

もとより、この問題は、歴史と地理の間だけでなく、あらゆる分野横断的な研究(例えば、たこつばの地域研究)に介在する問題であり、境界現象の比較を行うボーダースタディ

(3) 岩下明裕「ボーダースタディーズの胎動」『国際政治』162号、2010年、1-8頁。

ーズにも当てはまる。この観点にたつとき、手堅く地道な歴史研究とダイナミックな空間比較を目指す地理学は決して相反するものではない。互いの弱点を相互に補う連携のなかで、それぞれの研究の精緻化を目指す良きパートナーとなりうる。「鳥なき里のコウモリ」を看破するためには、コウモリを里の外に引っ張り出すか、コウモリの里に鳥を連れて行くしかない。本稿がいささか歴史研究に厳しい評をなしているのは、地道な歴史研究を日々の生業とする研究者にぜひ地理学のもつ意義を理解してほしいからである。翻って、地理学者は歴史研究のもつ微細かつ精緻な史実にこだわる姿勢をみてほしいとも思う。自分の里にこもらず、互いの境界をもっと自由に往来しよう。

いささか私事を交えれば、山崎と評者は17年前に山口県立大学で大学教員としてのキャリアをともに歩み始めた。山崎は人文地理学、評者は国際関係論の研究室であったが、歴史研究から国際政治を指向していた評者は、山崎の問題関心や仕事を、当時、十分には理解できなかった。他方で、山崎は、中国とロシアの国境問題の分析に熱中し、日々、中国とロシアの地図を研究室で眺める評者に対して、「おまえのやっていることは政治地理学だ」と言い続けてきた。だが評者が自らの仕事の性格に気づいたのは最近のことであり、自らの仕事の意味に当時、気づかなかった理由も今では理解している。この意味で、本評の過剰な歴史主義に対する批判は、評者自身にむけられている。

多くの読者が本書を手にとることで、自らの研究のなかにある「政治の地理学」に覚醒することを願わずにおられない。